第３部　世界の各地で

ワールドカップ

ワールドカップ2002の運営にみた異文化との衝突

御園慎一郎（昭和51年卒業）

岡野さんを応援します

「岡野さんの手で開催されるワールドカップ日本大会を見たい、というのがLB会に関係している人すべての願いです。どんな形でお手伝いできるかは知りませんが、全力で支援させてもらいます」。1994年5月23日、ホテルオークラの一室での会話の一部だ。

この直前に、ＦＩＦＡ理事会のメンバーの選挙で、日本は副会長を送り込むことに失敗し、韓国にその椅子を奪われていた。日本と韓国が開催国に立候補している2002年のワールドカップ開催国を決定するのはＦＩＦＡ理事会。その選挙での敗北は、日本のワールドカップ招致に暗い影を落としていた。

そんな状況のなかでワールドカップ招致委員会の総会が開催され、関係者が新たな決意で巻き返しを図っていこうという決意をしたのがこの日だった。この日は2002年のワールドカップ日本開催にとってターニングポイントとなった日だったと言って過言ではないだろう。

東大サッカー部の大先輩であり、我が敬愛する岡野俊一郎さんは、この後、招致委員会の実行委員長として、そしてさらには日本サッカー協会の会長として、この困難な仕事を推進することとなる。

そんな日であったからこそだろうが、当時電通から日本招致委員会に出向していた広瀬一郎君（ＬＢ、昭和54年卒業）が、先行きの見えない困難な状況のなかだからこそ、岡野先輩にご奮闘いただきたいということで、招致委員会のパーティーのあと、数人の仲間を集めてささやかな２次会を設営していたのだった。

ワールドカップ開催のためには、越えなければならないさまざまなハードルがあった。その一つが全国10カ所に、屋根付きで4万人収容可能なスタジアムを整備することだった。当時の地方公共団体の経営感覚からいって、この条件は簡単にのめるものではなかった。このため当時自治省財政局にいた私は、大分県に出向していた溝畑宏君（昭和60年卒業、現在大分トリニータ社長）の要請を受けて、地方公共団体の屋根付きスタジアム整備を可能にするための地方財政措置創設の作業をしていた。その時、この財政措置研究会のメンバーに岡野さんにも加わってもらっていた。

この研究会の報告に沿った財政支援措置が制度化されていなかったら、今では当たり前に感じられる屋根付きの大型スタジアムの建設はできなかっただろう。ワールドカップ開催への道はさらに困難なものになっていたと言っていいと思う。このことは、当時開催地として本命視されていた広島市が、財政措置が用意されたにもかかわらず、自らの厳しい財政状況を考えてスタジアム建設を断念し、結果としてワールドカップの開催地となれなかったことを思ってもらえればお分かりいただけるだろう。

日本組織委員会に出向

2002年のワールドカップは日本と韓国の共催となった。その後、私は愛知県に出向してしまい、岡野先輩へのお手伝いは、ワールドカップのチケットを買って大会運営に財政面からささやかな貢献をすることぐらいしかないのかなと思っていた。ところが、2000年7月にＪＡＷＯＣ（2002ＦＩＦＡワールドカップ日本組織委員会）にチケット、輸送、宿泊担当の業務局長として、これまた出向することになってしまう。

これには裏がある。ＪＡＷＯＣの事務総長には遠藤安彦氏（昭和38年卒）が就任したが、誰に事務総長になってもらうかについて僕と溝畑宏君

2002 年ワールドカップのエンブレム

が話し合い、結果としてその筋書き通りになって実現したものだった。その縁で愛知県から直接ＪＡＷＯＣに行くことになった。

有楽町のＪＡＷＯＣ事務所では副会長の長沼健さんが待っていてくれた。理事会のメンバーにはＪＦＡ（日本サッカー協会）会長に就任されていた岡野俊一郎氏、そして、私が現役時代に監督をしていただいていた浅見俊雄先生（ＬＢ、昭和31 年卒業、ＪＦＡ理事）や川淵三郎氏がおられた。結果として毎月開催していたＪＡＷＯＣの幹部会、あるいは理事会で岡野さんたちからの指導を受けることになった。６年前にホテルオークラの一室で申しあげた言葉のとおり、岡野先輩のお手伝いをすることになってしまったわけだ。

図らずもワールドカップという世界最大のイベント運営の中枢部分を担当することになった。業務局のスタッフにはＪＦＡから出向してくれた水谷尚人君、不破信さんがいてくれたし、チケットに関してはチケットぴあ、輸送と宿泊に関しては日通、ＪＡＬ、ＡＮＡ、ＪＴＢ、近畿日本ツーリスト、日本旅行、西鉄観光からの出向者が揃っていた。これならドシロートの僕でも何とかなるのではないかと思ったが、そんな甘い考えは、着任３日後にバルセロナで行われたバイロン社（ＦＩＦＡのエージェント）、ＫＯＷＡＣ（2002 ＦＩＦＡワールドカップ韓国組織委員会）との３者ミーティングで吹っ飛んでしまった。

「21 世紀初、アジアで初、初の共同開催」というキャッチフレーズの通りだったが、それが困難の一因にもなった。ＦＩＦＡのサッカー文化と我々のサッカー文化とのギャップ、改めて感じる近くて遠い韓国との距離感、そして寄せ集め部隊であるＪＡＷＯＣのなかでの仲間の結束の難しさ。

異文化の衝突でトラブル

はじめは「トヨタカップのような国際試合を32 試合こなせばいいのだろう」とたかをくくっていたが、ワールドカップは世界を巻き込んだ途方もない生き物だった。だからこそ過去に開催することができた国は 13 カ国にすぎないのだ。それに加えて、これまでの開催地の欧州、南米と比べれば文化の違いがあまりにも大きいアジアでの開催、また大会開催の意義について日本とは相当に認識の違う韓国との共同開催だ。異文化の摩擦によるエピソードには事欠かなかった。

ＦＩＦＡとは大会終了後まで問題を持ち越した。その最大の原因は、ＦＩＦＡが「ワールドカップは我々の大会であり日本と韓国に開催させてやっているのだ」という姿勢に終始し、彼らの尺度で物事をすべて律しようとしたことにある。

むろん、ＦＩＦＡが、最大の収入源である大会をコントロールしようとすることは、理解できないわけではなかった。大会運営のノウハウは彼らの方に一日の長があることも事実だった。とはいえ、日本と韓国というアジアの国で開催する初めての大会なのだからそれぞれの国情というものを反映した円滑な運営という視点でＪＡＷＯＣ、ＫＯＷＡＣ双方の意見も聞こうという姿勢があってもよいのにと、日本サイドの観点から、あるいは同じアジアということで韓国サイドと共同戦線を張って、何度も提言した。

しかし「日韓のスタッフはワールドカップやサッカーのことは何もわかっていないのだから、俺たちＦＩＦＡの言うとおりやっていればいい」と言わんばかりの態度を変えなかった。これには本当に閉口した。

チケッティングに関しても思惑とは違うことばかりだった。

問題発生の原因は、ＦＩＦＡのエージェントにすぎないバイロン社が、自己の立場を主張し、我々の自由度を極度に制限したことにある。加えて、契約文化の国から来た人間だと思って交渉していると、これがとんだ大間違いで、我々には義務を徹底的に要求するにもかかわらず、自分たちは約束事を簡単にほごにし、あまつさえ、約束を破らざるを得なくなった責任はＪＡＷＯＣ側にあるなどと言い出すしまつ。これには開いた口がふさがらなかった。

一方、ＫＯＷＡＣとの関係も微妙だった。対ＦＩＦＡ、バイロンについて言えば日韓でスクラムを組むことが多かったし、韓国の人たちのメンタリティーもかなり理解できるようになり、友情も生まれていった。

とはいえ、国民性は違う。一衣帯水とはいうものの権利主張の強さは格段の差だ。その典型的な例が大会の呼称問題だった。当初アルファベット順で「2002 FIFA World Cup Japan／Korea」とする予定だったものが、韓国の反対で「2002 FIFA World Cup Korea/Japan」に変更されることになった。この問題は日本語表記のあり方まで及ぶのだが、いずれにしても韓国サイドの自己主張の強さとＦＩＦＡを巻き込む政治的な粘りに驚かされたものだった。

このほかにも、さまざまな摩擦が生じ、そのことが報道されるたびに何をやっているのかと非難を受けた。我々の努力の外に原因がある、そのことをマスコミや理事会で報告しても、日本人社会の行動感覚の外にある彼らの判断基準を、日本の人びとには、なかなかわかってもらえない。サポーターたちからも強烈なブーイングを受けた。その結果、理事会でも、我々の事務処理方法に批判を受け続けた。これは辛かった。

そんなある日、理事会の後にふらっと岡野会長が僕の部屋に入ってこられた。そして、「御園君、全部自分たちで抱え込まなくていいんだよ。僕らも協力するのだから。フットボールと同じだ。チームワークでやろうじゃないか」と言ってくれた。正直、嬉しくて泣きそうだった。そんな岡野さんたちにも支えられて大会を迎えることになる。

大会開幕前日の高輪プリンスのパーティーでの岡野さんの挨拶、「Football is my life.　World cup is my dream.　And my dream has come true.」を一生忘れない。

岡野さんの夢。中学のとき映画館で見たロンドン・ワールドカップ以来抱き続けた僕の夢。そして日本中の、いや世界中のサッカー小僧と元サッカー小僧たちの夢が実現するのだ。そう思うと体が震えた。

チケット問題の真相

その後の大会開催中の空席問題を初めとしたチケットトラブルなど、辛いことはさらに続いた。

空席問題の原因は、バイロンが必要以上のチケットを我々に知らせることなく確保し、しかも販売にまわしていなかったことにある。

なぜこんなことをしたのか。圧倒的に需要のほうが大きいマーケットゆえにいくらでも売れる、ＪＡＷＯＣなんかに任さないで自分たちで売れば手数料だけでも相当な儲けだとでも思っていたとしか思えない。

確かにそうだったかもしれないが、その目論見を阻んだのが彼らのお粗末なオンラインシステムだったのはお笑いだ。とはいえこの売り残り（売れ残りではない）対応も難題だったが、チケットぴあの販売ノウハウがものをいい、ＪＡＷＯＣに任すことになった50パーセントは電話回線システムで即座に完売した。この過程でＮＴＴ回線のシステムがダウンし国民生活に影響が出そうになっていると聞いたときはさすがに青ざめたが……。

一方残りの50パーセントを自分で売ると言い張っていたバイロンは、相変わらずオンラインシステムがダウンの繰り返しで売り切ることができず、挙句の果てに、我々ＪＡＷＯＣに対しても不測の事態が発生する可能性が高いため絶対に行わないこととしていた対面販売に手を出した。決勝

前日、東京フォーラムのバイロンの事務所前にその前夜から徹夜で並んだ日系ブラジル人を含む4,000人のファンの列。このファンに対するバイロンの対応もきわめて無責任かつ誠意のないものだった。

並ぶだけ並ばせておいて一人当たりの販売枚数を決めることすらしなかったため、一人で10枚20枚と買っていった人がいたという。チケットをゲットできなかった2,000人以上のファンが残るなか、完売を果たしたバイロンはさっさと事務所を閉めて逃げてしまった。

それでもあきらめ切れないファン500人が残って騒いでいる、何とかしろと丸の内署からＪＡＷＯＣに要請が来た。何で自分がバイロンのために謝りに行かなければならないのかと思った。でもこんなことでせっかくファイナルまでたどり着いた大会に傷をつけたくないという一心で身の危険を覚悟して500人のファンの前に立った。

相手はほとんどが日系を含むブラジル人。こっちはポルトガル語の通訳で話した。きわめて険悪な空気が漂っていて、いつ袋叩きにされてもおかしくないと思った。20分ほど、「チケットは残っていない、僕としてはどうしようもない、申し訳ないがテレビかパブリック・ビューイングで応援してくれ」と言い続けた。するとファンの代表格で、ひときわ早口のポルトガル語でまくし立てていた太った中年のおばさんが、突然僕を背にして群集にしゃべりだした。アー、これは逃げなきゃと思ったが完全にファンに囲まれていた。どうしようと身構えた瞬間通訳が「いいおばさんですね、この人、御園さんに何を言ってももうどうにもならないわ、帰りましょう、と言ってます」と囁いてくれた。助かった、と同時に燃えたら激しいが、あっさりもしているラテン気質に救われたと思った。

そして決勝戦、恐れていた偽造チケットがついに出現した。この対応に追われて横浜スタジアムにはいたものの試合は全く見られなかった。

大会が始まったらすることがないから好きな会場にいて試合でも見てればいいと言われていて、

岡野俊一郎さん（右）と御園慎一郎

大会さえ始まれば楽しい毎日だと信じそれだけを楽しみに仕事をこなしていたと言っても過言ではなかった。ところが現実は正反対。大会を通じてチケット問題の対応に追われた結果テレビ観戦すら満足に出来ず、スタジアム観戦は1試合もなかった。ワールドカップの試合をしっかり見ないなんてことは、テレビ生中継が始まったアルゼンチン大会以来初めてだった。

こうして僕のワールドカップは終わった。よい思い出ばかりではなく苦いものが多いとしか言いようがない。でも、やっぱりワールドカップだ。ＦＩＦＡブラッター会長が「World Cup of Smiles」とこの大会のことを絶賛してくれたとき、ああ、やり遂げたのだという思いがこみ上げてきた。サッカーを愛するサポーターたちのためにも途中で投げ出さないでよかったとしみじみ思った。

というわけで、岡野会長にとっては頼りないお手伝いさんだったかもしれないけれど、何とか乗り切ったといってよいかなと思っているが、どうだったのだろうか。岡野先輩、ＬＢ会の皆さん、お許しいただけるでしょうか。え、もう昔のことだから忘れたって？

ワールドカップ

私はコレで会社を辞めました

広瀬一郎（昭和 54 年卒業）

電通でサッカーにかかわる

「サッカーでメシを食っている」などと言えば、「Ｊリーガーかな？」と思うのが通り相場だろうか。（我々のころはプロサッカー選手なんていなかったなあ）。だが、「50 歳を過ぎていまだ現役」と聞いて「選手ではないな」と分かるはずだ。今であれば、「Ｊクラブに勤めている」か「選手のマネージャー」と思われるかもしれない。が、どちらも不正解。回りくどい出だしで恐縮だが、現在の私の仕事を説明するのはなかなか容易ではない。

1980 年に電通に入社し、20 年後に退社するまで、その中のかなりをサッカーに関わって過ごした。その延長で、現在も、かかわっている。

Ｊリーグが誕生するにあたって、電通ではなく、博報堂が大きな役割を果たしたことは広く知られた事実だが、電通が不戦敗を喫した時の電通側の担当は私だ。だからサッカーで食ってると言っても、所詮大きなことは言えない。その経緯と結果には忸怩（じくじ）たるものがあるが、それは愚痴になるのでやめておく。そして、博報堂の仕事振りには大いに敬意を評する。（詳しくは拙著「Ｊリーグのマネジメント」を参照されたい）。

もっともその後、Ｊリーグの経営諮問委員会ができたおり、川淵さんに請われて初代のメンバーとして名を連ねたことは、多少自慢してもいいかもしれない。創設時から現在まで委員長をしている武藤君は、50 年入学の同期で理Ⅱから教育に進んだ変わり者。向丘寮で同じ釜の飯を食った仲だ。（ここだけの話だが、武藤君は 2002 年のＷカップまで、サッカー観戦をした経験がなかった。自他共に認める全くのサッカー音痴である）。

80 年代の後半は、サッカー担当として「トヨタ杯」「キリン杯」「ゼロックス杯」全てのプロデューサーであった。

メキシコ 86 予選、ソウルでの思い出

Ｗカップと初めて関わったのは、86 年のメキシコ大会だった。85 年末の組み合わせドローでメキシコ入りしたときは、街のいたる所でまだ震災の余燼（よじん）が燻っていて、「本当にここで、できるんかい？」と訝った記憶がある。

マラドーナが同じ日にアステカスタジアムで２度も神になったのを目撃することにもなった。最初は「神の手」として。２度目の神業「5 人抜き」は、テレビ観戦の方にはイングランドの選手が随分と鈍に見えたのではないだろうか。彼の地の標高を知れば、あれが普通であり、マラドーナが異常だということが分かるはずだ。小生はメキシコシティーでビールを２杯飲んで、300 メートル先のホテルまで２度途中休憩した。あの空気の薄さであのプレーをするマラドーナは、将に人にあらず。（神ではなくて、野獣だと思うけど…）。

86 年大会は、アジア予選の際にメキシコの本大会以上に強烈な思い出がある。「この青空はメキシコに続いています」とＮＨＫのアナウンサーが言い、木村和司の伝説のフリーキックによって、後に「最もＷカップに近づいた日」と呼ばれるようになったあの日はＬＢ会の方なら誰でも記憶にあるだろう。

次のソウルでのアウェー戦、まさに「とどめを刺されたあの日」、私は仕事でチャムシル競技場にいた。が、ゲームの記憶が全く残っていない。というのも、電通扱いの場内広告看板が、ゲーム開始直前に撤去されてしまったからだ。最初は看板の修復のためかな？　とリヤカーで運び出されていくのを見ていたが、２度と現れずにゲーム終了である。何が起きたのかさっぱり分からず、かといって場内警護のために銃を構えた韓国の軍人

を相手に、関係者と会いたいので入れろ！　と日本語で直談判する勇気はなかった。

宿舎に戻り、まんじりともせず夜を明かしたら、韓国側の代理人が、かご一杯の韓国産のマツタケを手に夜明けに謝罪にやってきた。「チョン・ドハン大統領の陸軍の友人が、広告看板の代理店を始めたので、そこの扱い以外の看板を全て撤去させた」との説明。そう言えば、他にも数枚が撤去されていた。幸いその情報は、スポンサー企業のソウル支社から本社にももたらされていて、大問題にはならずに済んだ。が、ゲーム最中は観戦どころではなかったのである。

2002年W杯の招致

90年のイタリア大会も担当者として100日ほどのイタリア滞在。12個のスタジアムのチェックを２泊３日で行ったときは、へとへとになったのを覚えている。

ミラノでの開幕の前前日に、ローマのカバリエリ・ヒルトン・ホテルでＦＩＦＡの総会が行われた。日本が2002年の大会開催意思を初めて表明するパンフレットを、そこで配布したのは小生だった。日本サッカー協会から送られたパンフレットを同ホテルに事務局を構えていたので預かったのだが、誰も配らないので、結局、自分が配る羽目に陥った。内心では、「日本でWカップなんて開催できるわけ、ないだろうに！」と思いながら配っていた記憶がある。

94年のアメリカWカップ開催直前に、Wカップの招致委員会のメンバーが、ほぼ総とっかえになった。大先輩の岡野俊一郎さんが招致委員会の実行委員長に就任され、そのお披露目を兼ねたレセプションがホテル・オークラで執り行われた。小生も何かご協力できないか、と考え、若手有志を募って、岡野さんを支援する「勝手連」を組織し、レセプションのあとにオークラの別室で岡野先輩にメンバーを紹介した。この事実と、その面子はそこに居合わせたメンバーしか知らないし、今日まで秘密にしてきた。もう、そろそろ公にしていいだろう。今回のＬＢ会のコラムで初公開である。（ただし個人名は秘す）。

結局、その後、同じ年の11月に私自身が招致委員会事務局に出向することになった。何だか自分を売り込んだみたいだが、そんなつもりは毛頭なかった。日本にＪが誕生してからは、Wカップの日本開催は必ずしも非現実的な絵空事ではなくなっていた。Ｊの誕生については何の貢献もできなかったので、サッカーマンとしては何らかの支援をしたかったというのが、当時の偽らざる気持ちであった。

日韓共催にショックを受ける

2002年の大会共催は、ご存知のように96年の5月に決まった。それは我々が２年の歳月をかけ、数十億円のコストをかけた招致活動とプレゼンテーションとはほとんど関係のない論理によるものだった。日韓の共催に反対ではないが、こちらとしてはルール通りに戦うべく一生懸命に準備していたのが、最後の瞬間にルール変更されたのである。ショックを受けないわけがない。完全にアノミー状態に陥った。もうサッカーの仕事、スポーツの仕事から離れようと決心した。

「次は環境だ」と思い、会社を説得し、ワシントンの環境ＮＧＯにインターンとして行かせてもらった。時は99年、米国がＩＴバブルの頂点の時である。そこでのある出会いによって、スポーツ専門サイトを日本に立ち上げるプロジェクトに関わる羽目に。2000年に電通を退社し、スポーツナビというサイトを立ち上げたのだった。

結局スポーツかよ！…ま、仕方がない。他に能がないことは認めよう。結局コレ（サッカー）が元になって会社を辞める羽目に。そして、紆余曲折を経て、現在は大学でスポーツビジネスを教えている。今年４月から多摩大学・大学院にて、スポーツビジネスコースを設けるプロジェクトを立ち上げることになった。

ワールドカップ

WM 74　西ドイツ大会

小林邦彦（昭和 40 年卒業）

すごいチームを現場で見た

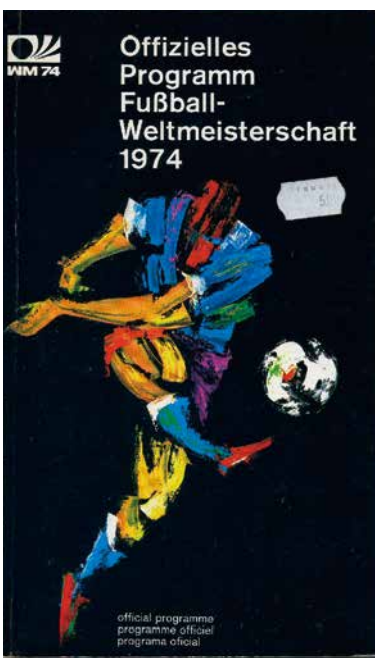
現役のころは先輩方が入手してくれたワールドカップの映画を勉強のために見せてもらい、世界にはこんな凄いものがあるのかと自分たちとは全く次元が違う世界のことと思っていた。ところが、1974 年 6 ～ 7 月のドイツ大会で 1 試合ではあるが、スタジアムで観戦する機会を得た。

1972 ～ 74 年の 2 年間、私は当時の西ドイツ・デュッセルドルフにあるマックスプランク鉄鋼研究所に会社から派遣されて留学していた。そこのドイツ人同僚から切符が手に入ったからということで同僚や、当時日本から来ていた義母も連れて、デュッセルドルフのライン・シュタディオンに出かけた。試合は 2 次リーグの地元西ドイツ対スウェーデン。結果は 4－1 で西ドイツが勝って、最終的には西ドイツの優勝につながる。

68,000 人収容のスタンドはもちろん満員、しかし後年のフーリガンのような無法はなく秩序はあったように記憶している。その地鳴りのような歓声などは日本では経験したことのないもので、さすが本場と思わせた。とにかく、西ドイツはゲルト・ミュラー、ギュンター・ネッツァー、フランツ・ベッケンバウアーなど、今となっては伝説的なプレイヤー揃いで観客の応援はもちろんだが、こんなすごいチームを現場で見ることができたのは、今思えば夢のような話である。

そして決勝は西ドイツ対オランダ。ヨハン・クライフを擁するオランダとの接戦を 2－1 で制して西ドイツは優勝した。その優勝の瞬間は、残念ながらミュンヘンのスタジアムではなく、日本へ帰国する義母を車で送りがてら寄ったローレライの岩の上にあるレストランのテレビ中継で見たのだった。

ほかにもブンデスリーガのＴＶ放映を見たり、ライン・シュタディオンでの地元フォルトゥナ・デュッセルドルフとバイエルン・ミュンヘン（ベッケンバウアーなど）の試合を観戦したりできたのは、サッカーの本場ならではの経験であった。今にして思うともっと実戦を見ておきたかったと思うが、当時は週末に、地続きの国々を車で旅行して未知の国や街を知ろうとするのに忙しかったので仕方なかったかと自分に言い聞かせている。



WM 74 公式プログラムの表紙

ワールドカップ

1986 年ワールドカップ・メキシコ大会

宮路康利（昭和 47 年卒業）

高田主審をサポート

私は 1985 年から 89 年まで、幸運にもワールドカップ・メキシコ大会を挟む 4 年間メキシコシティに駐在しました。

86 年 5 月、大会開幕が間近に迫ったころ、家内と幼い息子二人を連れて休暇がてらロスアンゼルスに健康診断を受けに行きました。が、その最中に家内が盲腸炎で入院するというハプニングが起こり、結局休暇を楽しむこともなく退院後、意気消沈してメキシコへ戻ってきました。

そこへ当時日本サッカー協会の審判委員長を務めておられた現ＬＢ会理事長の浅見俊雄さんからの手紙が届いたのです。その内容は、国際審判員の高田静夫氏がメキシコ大会の審判に指名された、日本の審判としては初めて主審を務めることになる、晴れの舞台ではあるが重責を担って赴くのでできるだけのサポートをしてもらいたい、また戸苅晴彦さん（我々が現役のころ教養学部の先生でコーチをしてくれた方）や協会関係者も視察に行くので連絡があったらよろしく頼む、というものでした。これは意気消沈している場合ではない、と気持ちを大会モードに切り替えました。

大会期間中、高田さんには、日本の家庭料理を食べ四方山話をしながらリラックスしてもらうべく何度か家に招きました。温厚誠実な人柄で、息子らもよくなつき、彼に抱かれた写真が残っています。大会から帰国後、彼が日経朝刊の文化欄にメキシコでの体験をつづりましたが、その中に浅見さんに加え、私のことも書かれていたのには驚きました。その後も年賀状などのやり取りをしています。

協会の長沼会長から感謝状

協会役員として視察に来ておられた大先輩の岡野俊一郎さんには、高田さんや他の役員の方がたと共に大使公邸での夕食会に出席してもらいまし

宮路宅での高田さん、右は宮路

ワールドカップ・メキシコ大会で主審を務めた高田静夫さん（中央）

スペイン対アルジェリア戦の主審としてピッチに向かう高田さん

た。日ごろから懇意にしていた運輸省出身の大使館員に大使との懇談の場を設定する話を持ちかけたところ、夕食会にまで発展したものでした。

夕食会では、当然ワールドカップの話題に集中しましたが、さながら岡野さんの独演会のようだったことが印象に残っています。余談ですが岡野さんからは、送迎した私の車が汚れていたので「もっときれいにしたら」と言われたのを覚えています。このころは雨期で午後になるとほとんど毎日スコールがあり、分厚く大気を覆っている汚染物質を雨がすべて吸収して車に降りかけるので、車は泥水をぶっかけたような状態になります。朝、会社の用務員にきれいにしてもらっても、ひと雨でこんなふうになるんです、と説明し納得してもらいました。

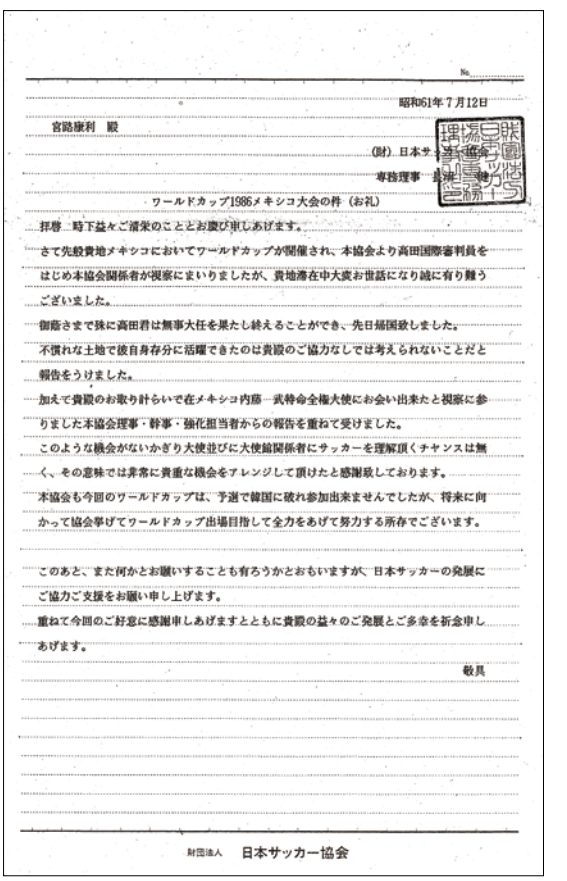
戸苅さんにも久々に会うことができ、焼鳥屋に招待しました。焼鳥屋といっても日本食レストランですからメキシコでは高級な部類に入ります。

在メキシコ大使公邸での夕食会で。前列右から２番目が高田さん、中央が内藤大使夫妻、左から２番目が岡野さん

在メキシコ大使公邸での夕食会で。左が宮路

そこでは、日本代表監督だった石井義信さん、技術委員だった平木隆三さんたちもご一緒で、こちらからメキシコでの体験を話す一方、皆さんからは当時の日本サッカー界の話を聞かせてもらいました。酒がすすむにつれ、オフレコにした方がよいような話もいろいろと出てきた記憶があります。その中味は忘れました。

またサッカー部の後輩であり、スポーツ・マネジメントの専門家である広瀬一郎さんについてもちょっとした接触がありました。どういう経路からか今では覚えていませんが、当時電通から派遣されていた彼が、メキシコではまたの名を‘モクテスマの逆襲’（モクテスマとはスペインに征服された時のアステカ帝国の王様です）と言われる下痢に見舞われ、ホテルで寝込んでいるという連絡がありました。それは気の毒ということで家内に消化の良い弁当を作らせお茶とともに届けてやりました。2006 年ドイツワールドカップ直前に



No.

昭和61年7月12日

宮路康利　殿

(財) 日本サッカー協会
専務理事　長沼　健

ワールドカップ1986メキシコ大会の件（お礼）

拝啓　時下益々ご清栄のこととお慶び申しあげます。

さて先般貴地メキシコにおいてワールドカップが開催され、本協会より高田国際審判員をはじめ本協会関係者が視察にまいりましたが、貴地滞在中大変お世話になり誠に有り難うございました。

御蔭さまで我に高田君は無事大任を果たし終えることができ、先日帰国致しました。

不慣れな土地で彼自身存分に活躍できたのは貴殿のご協力なしでは考えられないことだと報告をうけました。

加えて貴殿のお取り計らいで在メキシコ内藤一武特命全権大使にお会い出来たと視察に参りました本協会理事・幹事・強化担当者からの報告を重ねて受けました。

このような機会がないかぎり大使並びに大使館関係者にサッカーを理解頂くチャンスは無く、その意味では非常に貴重な機会をアレンジして頂けたと感謝致しております。

本協会も今回のワールドカップは、予選で韓国に破れ参加出来ませんでしたが、将来に向かって協会挙げてワールドカップ出場目指して全力をあげて努力する所存でございます。

このあと、また何かとお願いすることも有ろうかとおもいますが、日本サッカーの発展にご協力ご支援をお願い申し上げます。

重ねて今回のご好意に感謝申しあげますとともに貴殿の益々のご発展とご多幸を祈念申しあげます。

敬具

財団法人　日本サッカー協会

日本サッカー協会から贈られた感謝状

行われた東大サッカー部主催の五月祭シンポジウムにパネリストとして参加していたので、彼にこのことを話しましたが、あまりよく覚えていないようでした。

こうして浅見さんからの手紙がきっかけでいろいろなことがありましたが、サッカー協会の皆さんへの協力が評価され、後日協会から感謝状をもらうことになりました。この礼状は、実はここ十数年の間転勤を繰り返すたびにそのまま私とともに移動してきた段ボール箱の底に眠っていました。先日神戸に転勤したあと久々に中をほじくりかえしていて見つけたものです。ついこのあいだ惜しまれながら亡くなった長沼さんから頂戴したものです。

準決勝でマラドーナを見る

ところで、もう一つ肝心な試合の観戦の方ですが、これもいろいろありました。

まずチケットの入手がなかなかうまくいきません。スペイン語が話せれば自力で入手できたのでしょうが、赴任後１年足らず学校へも行かずにスペイン語を自習していた時期でそれは無理。結局、入手できればどの試合でもかまわない、ただアステカかオリンピック・スタジアム（メキシコシティでの試合はこの２か所のみ）の試合に限るという条件で日系の旅行代理店に頼むことにしました。

なんとか３試合のチケットが手に入りましたが、１枚は予選リーグのアルゼンチン対ブルガリア、あとの２枚は、準々決勝と準決勝でした。この大会は、後に「マラドーナのワールドカップ」と言われた大会ですが、なんという運命か準々決勝、準決勝もアルゼンチンの試合にあたりました。

準々決勝は、あの有名な‘神の手’と５人（?）抜きによるマラドーナの２得点でイングランドを破った試合です。ところが、その日は日曜日で仕事も関係なく大手を振って歴史的現場に居合わせることができたにもかかわらず、息子たちの具合が悪く看病で行けなくなったため、家のテレビで観戦となりました。皮肉な結果ですが、テレビでは２得点の場面を繰り返し流してくれたので、現場では見逃したかもしれない得点に至る経過が良くわかりました。

準決勝は平日でしたが事務所を抜け出してアステカ・スタジアムへ行きました。相手はベルギーでしたが、ほとんど一方的な試合でアルゼンチンが勝ちました。この試合も記録を見るとマラドーナが２点決めたようですが、あまり印象に残っていません。現場は一過性のためでしょうか。あるいはこの大会の何年か前、国立競技場で行われたワールドユース決勝戦で彼のプレーを初めて見たときの、相手ソ連のプレーヤーをものともしない大活躍の印象が強烈に残っていたせいかもしれません。そういえば、予選のブルガリア戦でも彼のプレーを見たはずですが、全く思い出せません。出場していなかったのか？　そんなことはないでしょうが。

ということで、この大会のころが４年間の駐在生活で最も多忙な時期だったような気がします。メキシコチームが勝つと街の至る所で若者がクラクションを大きく鳴らし大きな国旗をかざしながら車を走らせていた光景を、今でも思い出します。

オリンピック

東京オリンピックに役員として参加

樋口周嘉（昭和 40 年卒業）

まずは入場券の売りさばきから

我々の最終学年の昭和 39 年（1964 年）は東京オリンピックの年。10 月 10 日から 24 日のオリンピックが終わった次の週からやっとリーグ戦が始まり、12 月 12 日までという、例年より 1 ヵ月ほど遅いシーズンだった。

10 月 10 日のオリンピック開会式の日、御殿下グラウンドで練習している我々の頭上に自衛隊のジェット機が空に描いた五輪のマークが綺麗に見えたのを鮮明に覚えている。

この年、主務を務め、関東学連にも顔を出していた私は、練習そっちのけでオリンピックにかかわっていた。大会前は、蹴球協会を経由して手に入れることができるサッカーの試合の入場券を、現役部員および OB の皆様に売りさばくこと。大会が始まってからは、サッカー競技の“補助役員”として駒沢競技場で行われる試合の記録係を務めることであった。

入場券はかなりの数をさばき、協会経由で手に入らないものは、荒川区にあった当時の大毎オリオンズのホーム球場・東京スタジアムでの売り出しに並んで手に入れた覚えもある。

日本はこの大会でアルゼンチン、イタリア、ガーナと予選リーグを戦うこととなっていた。人気があった入場券は、この予選リーグの日本が出る試合と、日本が勝ち上がったときに戦う可能性がある準々決勝以降の試合だった。

イタリアはオリンピック開催まで 1 ヵ月を切った時点で、プロ選手が含まれていることが判明して参加を辞退し、代わりに出場権を得たポーランドも準備が間に合わないとして出場を辞退したために、日本のグループは変則的に 3 チームで争われることとなった。

イタリアの辞退で思い出すのは、まだプロ選手問題が明らかになっていないある日、蹴球協会に顔を出すと、大きな外人が何やら一生懸命に頼み込んでいる。なにごとかと思ったら、イタリアが必ず出る準決勝の切符が欲しいので、何とかしてくれということだった。協会の担当者が私が来たのに気付き、「ちょうど良かった、まだその切符を持っているのではないか」と聞いてきた。調べてみると何と 2 枚残っている、これを大いに恩着せがましくそのイタリアの大男に譲ったのであるが、辞退が決まってどうしたことやら ･･･。

駒沢で“日本 対 アルゼンチン”を記録

さて“補助役員”というのは競技場周りの種々の仕事のために、公式のオリンピックの役員のほかに集められたものだったが、青い上着とグレーのズボンにえんじ色のネクタイという正規の役員と同じ制服を与えられていたので（生地は安物だったらしいが）、外からは補助とは見えないカッコイイものだった。

補助の役員はサッカーの場合、関東学連 1 部、2 部のチームから出すようにとのことだったが 1 部のチームからは 6、7 名出ていたのに対して 2 部のチームからは 1 名のみ。その 1 名に東大からは学連に出ていた私がそのまま自薦で出たのである。与えられた役目は中大、立大のそれぞれ 1 名と合わせて 3 名での駒沢競技場の記録係というオイシイ役目だった（ほかには場外整理など試合を見ることができない役目もあった）。

日本の予選リーグの 2 試合は駒沢で行われた。結果としてグループ 2 位で準々決勝に進んだ日本のベスト 4 をかけた試合も駒沢であった。この日本の 3 試合を含め、全部で何試合の記録を付けた

のか記憶は定かでなく、記録もないのであいまいではあるが、日本がアルゼンチンに勝った試合の記録を付けていたということは忘れ難い思い出となっている。試合が終わると直ぐに記録を集計して報道陣に渡さなくてはならないので、勝利の後の歓喜の場面は目にしていない。ひたすら下を向いて記録の集計をしていたのである。

そのほかに記憶に残っているのは、ハンガリー６−５ ユーゴスラビアの試合で、どちらかが一方的にリードするということはなく点の取り合いで、記録を付ける身としては大変だったが、こんな面白いサッカーの試合があるのだと感心したことを思い出す。その後、ハイレベルのリーグや大会でこのスコアの試合にはなかなかお目にかかれない。

補助役員の余禄としては、１つは選手村への入場許可がもらえたこと。大会中の駒沢で試合のない日に駒沢の記録係の３人で選手村に入り、売店で当時は珍しかった PUMA のアップシューズを買ったことと、そのときテレビでは男子マラソンでアベベが走っているところが流れていたことが思い出される。もう１つはサッカーの決勝戦を役員席で無料で見ることができたこと。日本に準々決勝で勝ったチェコスロバキアを応援したが、ハンガリーに敗れてしまった。

卒業記念に対アルゼンチン３点目の写真

日本は、この大会で１勝１敗ながらグループ２位でベスト８入りを果たしたのだが、準々決勝でチェコスロバキアに完敗を喫し、この大会に限って特別に行われた５、６位決定戦に回ることになった。準々決勝で敗れた４チームが大阪に集まり、トーナメント形式で５位と６位を決めようという試合であった。

今と違って、試合は中１日で行われた。駒沢での１日おきの試合の３試合目に完敗した日本は、翌々日の大阪での試合に戦う力（心身ともに）が残っていなかったのか、イビチャ・オシム（前日本代表監督）が選手として出ていたユーゴスラビアに１−６で退けられ、記録上は７位タイに終わったのだった。

最後に思い出すのは、卒業を前にした追い出しコンパで後輩たちがくれた記念品が、アルゼンチン戦の３点目を小城選手が決めた場面の写真を引き伸ばしてパネルに貼ったものに皆でしてくれた寄せ書きであったことだ。このパネルは今でも（飾ってはいないが）家に大切に保管してある。

【参考】 東京オリンピック　日本の成績

【予選リーグ】

10 月 12 日

三ツ沢　　ガーナ　１－１　アルゼンチン

10 月 14 日

駒沢　　日本　　３－２　アルゼンチン

10 月 16 日

駒沢　　日本　　２－３　ガーナ

順位	国　名	勝	分	負	得	失	点
１	ガーナ	１	１	０	４	３	３
２	日本	１	０	１	５	５	２
３	アルゼンチン	０	１	１	３	４	１

（勝ちチームの勝ち点は 2）

【準々決勝】

10 月 18 日

駒沢　　日本　　０－４　チェコスロバキア

【5、６位決定戦　１回戦】

10 月 20 日

長居　　日本　　１－６　ユーゴスラビア

日本代表チーム

東大最後の日本代表？ ムルデカ大会マネージャー奮戦記

谷本篤信（昭和 51 年卒業）

初めての海外旅行で

ビルマ人主審の試合終了を告げるホイッスルが鳴った。私は喜びのあまり、スタンドのちょうど日本ベンチ裏手に位置した在留邦人の応援の日の丸に向かって何回となく飛び跳ねた。ガッツポーズではなく思わず両手がＶサインになったのは、決勝進出に必要なリーグ戦２位を確保した報告であり、２－２の試合結果そのものでもあり、２日後の 22 日の決勝戦での熱い応援の再現のお願いでもあった。

時は 1976 年８月 20 日、場所はマレーシアの首都クアラルンプールのその名もムルデカスタジアム。ちょうど 20 回を迎えたこの年のムルデカサッカー大会には当時でいう全日本、今でいう日本代表チームが参加していた。３月に学部を卒業して大学院生になったばかりだった 22 歳の私は、縁あってこのチームのマネージャーを務めていた。多少の英語力があったことで人選されたと後で聞いた。

その後、現在まで 30 年の社会人生活のうち 13 年を海外で過ごすことになるのだが、当時の私はまだ海外旅行の経験すらなく、国際線が初めてなら外国も初めて。海外遠征の経験豊富な二宮寛監督に一から指導を受け、また、大仁、落合、清雲といったベテラン級の選手にかわいがられ、なんとか自分の責任範囲であるチーム携行品や薬品を入れたスーツケースの面倒を見ながら、自分がお荷物にならないよう最後からくっついて行った。

大切な警官への挨拶

それでもなんでも、とにかく一度やればあとは度胸がつく。いちばん思い出深いお役目は試合当日にホテルからスタジアムへ向かうバスの先導警官へのご挨拶だった。なんといっても派手にサイレンを鳴らして晴れがましくスタジアムへ乗り込むのは気持がいいし、選手の士気にもかかわる。

これも二宮監督直伝だったと思うが、マネージャーはまずその日の先導の警官（たいてい２人組）をホテル入口で探し、格上と目をつけたほうに、“Thank you for your service.”とかなんとか言いながら礼儀正しく握手を求める。先方はなにやらモヤモヤっと言いつつ応じてくれる。先方の表情に、よほど注意していないと分からない一瞬の反応があったことを確かめて任務完了。何気ないこの儀式には、実は周囲の誰も気づかない裏があって、主役は握手する私の指の間にはさまれた小さく折りたたんだ心付けの紙幣。何事もなかったように紙幣は素早く警官の手から細身の制服のポケットに移動する。次の紙幣をセットしながら若手に向かう。郷に入っては郷に従え。ここで大事なことは必ず先輩から先に手続きを踏むことと、あくまでも堂々と振舞うことである。

まれに見る大混戦

話がそれたが、大会の方は前回優勝の韓国、２位の地元マレーシア、それに前年４位ながらひそかに初優勝を狙う日本など７カ国が参加。日本はインドに５－１、インドネシアに６－０と大勝。第３戦は好調な強豪ビルマとの２勝同士の対決。後半立ち上がりまでに２点を奪われたが、地力を発揮して釜本、奥寺のゴールで引き分けに持ち込んだ。第４戦はタイ。早い時間帯の釜本の連続ゴールで勝利は手中にと思ったが、不運な失点が続き、終わってみれば誤算のこれまた２－２の引き分け。

次の第５戦はリーグ戦の山場となる韓国戦。それまで、日本チームは身長で東南アジアチームを

圧倒する釜本が、ネルソン吉村のコーナーキックにピンポイントで頭を合わせるという必殺技と、この大会での得点王を機に翌年からブンデスリーガに移籍する奥寺の黄金の左足とでゴールを量産していたが、韓国戦では決め手を欠き、しびれるような互角の攻防のすえ双方無得点。

最終日の２カードを残して、決勝進出をかけたリーグ戦２位以上の争いは、地元関係者にまれに見る激戦と言わせたほどの混戦だった。仮に日本がマレーシアに敗れ、韓国ータイが引き分けると２位を争う４チームが勝点７で並ぶ可能性まであるというしびれる展開。最終日を前にした暫定順位は

①マレーシア４勝１分、勝点９、得失点差＋13、最終戦は日本
②日本２勝３分、７、＋10、最終戦はマレーシア
③ビルマ２勝３分１敗、７、＋３、全６戦終了
④韓国２勝２分１敗、６、＋９、最終戦はタイ
⑤タイ２勝２分１敗、６、＋４、最終戦は韓国

最終日は韓国ータイ戦が先に行われた。韓国が２－１の接戦でものにして勝点を８に伸ばし、日本を半歩リード。タイとビルマが２位争いから脱落し、マレーシアの２位以内が確定。その結果、日本はマレーシアに勝てば決勝進出、負ければ敗退。

そこまでは分かりやすいが、問題は引き分けた場合。日本、韓国が勝ち点、得失点差で並ぶことになる。この場合は総得点の多い方を上位とするのが大会規定。ところが、この時点では総得点までが 15 点で並んでいたのである。つまり、日本は韓国より上位に行くためには１－１以上の引き分けが必要ということになった。

「チャラでＯＫやて」

二宮監督は試合前のミーティングで勝つことだけが目標と言い切り、引き分けうんぬんには一切触れなかった。選手たちも勝つつもりでいたから、それ以上の情報は必要なかった。

試合は日本が前半早々あっさり失点。ところが、私は逆に内心これで喜んだ。大事な試合で先制されて喜ぶのも変な話だが、なにせ今日は絶対に負けないとの自信があるから「これで０－０の引き分けはなくなった。逆転勝ちか、悪くても１点以上とっての引き分けだから２位には入れる」と直感したのである。実際、今大会負けを知らない選手たちは先制されても落ち着いていたし、ベンチもそうだった。

その後、奥寺のゴールで同点。ところが、後半に入ってまた失点。ようやく残り７分、キャプテン釜本のどうだといわんばかりの豪快な劇的ゴールで再び同点。

このあと、ピッチ上の選手の間に微妙な戸惑いが生まれた。あの大きな釜本が、腰の脇で両手のひらをすばやく２、３回水平に回して首をかしげる。この細かいサインを翻訳すれば「チャラでＯＫか？」。無理をして勝ち越す必要があるのかをベンチに聞いてきたのである。

私は監督の指示を受けて頭上に両手で大きなマルを作った。釜本が回りの選手にこれを伝える言葉が、聞こえるはずのない距離なのになんとなく「チャラでＯＫやて」と聞こえたような気がした。選手のプレーに心なしか余裕が生まれ、試合はそのまま終了した。これが冒頭の場面である。

決勝戦は筋書き通り

翌日、マネージャーの私はマレーシア協会に呼び出された。決勝戦終了後のセレモニーの打ち合わせだという。行ってみるとなんのことはない分刻みの式次第がもうでき上がっていて、「優勝マレーシア」「準優勝日本」と刷り込んであるのには恐れ入った。準優勝でもトロフィーはあるらしい（実際、手にしたが、ずいぶん小さいトロフィーだった）。「キャプテン・カマモトが、ここでこうして、だれだれからトロフィーを受ける」という手順を教えられて帰ってきた。気の短い二宮監督にそのまま報告すれば不興を買うことは目に見えていたので、「その場で指示に従えばいいそうですから」と穏便に済ませた。

今のように日本代表の行くところ、世界のどこ

までもサポーターが大挙して乗り込む時代と違って、プレスはフリーの今井カメラマンがサッカーマガジンとの契約で帯同しているだけ。応援は現地在住の皆さんだけが頼り。ところが、在留邦人の皆さんはリーグ戦まではチケットを手配していたものの、日本チームの決勝進出は久しくなかったことでもあり、もともと地元ファンの間でも大人気でプレミアムがついていたという決勝戦のチケットは、日本の出場が決まってからではおいそれとは入手できなかったという。残念ながら決勝では５万５千の大観衆のなかにパラパラと日の丸が見える程度だった。

結果は０−２で主催者のシナリオ通り？に進行。刷り上がっていた式次第は無駄にはならず、日本は小さい方のトロフィーをもらうことになった。それでも大会史上最高の２位。帰国便で羽田（そう、当時は国際線もまだ羽田発着だった）に到着すると、プレス撮影の便宜のために機内から最後に降りてくれと待たされ、妙に小さいトロフィーを手にした釜本を先頭に歓迎の輪に迎えられたときは実に誇らしかった。

東大サッカー部といえば、大先輩方が日本代表チームの中心的存在として、また役員として輝かしい実績を日本のサッカー史に刻んでおられる。その歴史の一端で、東大サッカー部ＯＢとしておそらく胸に日の丸をつけた今のところ一番の若輩ではないかと思い、若い日の記憶をまとめてみました。

日本代表チーム

杉山隆一氏のお言葉

大塚　隆（昭和 44 年卒業）

メキシコ五輪チームの練習台

日本代表が 3 位入賞した 1968 年のメキシコオリンピックは、当時の部員の良き思い出ではなかろうか。ファンとしてのみならず、練習台として貢献したのでは、との実感があるからだ。

実業団選抜からなる当時の代表は、仕事場から駆けつけるため、岡野俊一郎コーチとのつながりもあってか、都心の御殿下での東大チームとの練習が何かと便利でもあったのだろう。八重樫、釜本、杉山、小城、征勝、輝紀……綺羅星（きらぼし）のごとく、多くは東京オリンピック以来のクラーマーさんの直弟子たちが勢ぞろいしたチームのお相手を務めた。試合形式や、ハーフコートでの集中練習形式もあったと記憶する。

監督から呼ばれ、杉山に付けといわれる。世界の、アジアでは絶対の俊足の杉山である。5m、10m ダッシュの速さ、停止、再スタートの緩急の変化は、実際に接してその軽快さがわかる。本来はこちらも同じポジション、無駄走りだけが取り柄の左のウイング。確かに足だけは速かった。敏捷さも持ち合わせているとの自負はあった。とはいえ先方はボールを持って速い。こちらはボールを持てばただの人である。雲泥の差ながら、幸いボールを持つ必要はなく、取りに行く必要もなし、センターリングさせるなとの指示。何度か「お前、じゃまだ」と。お役にたったのか、たたなかったのか。家宝にしたいほどのお言葉でした。

日本代表チーム

日本代表ヨーロッパ遠征をお手伝い

楠田喜宏（昭和 31 年卒業）

グラスホッパーとの試合をアレンジ

東大卒業 4 年後の 1960 年（昭和 35 年）から 1963 年までスイスのチューリヒに滞在した。スイス連邦工科大学に留学しながら勤務先（安川電機）と技術提携しているスイス、フランスの企業と技術連絡をするのが仕事だった。

出発前、日本蹴球協会の技術委員長だった竹腰重丸さんから「チューリヒにはＦＩＦＡの本部がある。何か頼むことがあるかもしれない。そのときは協会のアタッシェとして働いてくれ」との要請があった。きびしい外貨制限が行われていた時代で、ヨーロッパに駐在する日本人はきわめて少なかったころである。チューリヒには戦前、戦中から住み続けている人を含めても 10 人程度しかいなかったのだ。結局、ＦＩＦＡの仕事は１件も発生しなかった。当時の日本のサッカーの国際的な地位はそんなものだったのである。しかし、思いもかけなかった形で協会のお手伝いをすることになる。

折しも安保闘争の真っ最中で、５月の出発のとき宿泊した永田町の電機工業会の施設の周りでは終日シュプレヒコールがとどろいていたことを鮮明に記憶している。チューリヒに落ち着いた矢先、協会から「このたび東京オリンピックの準備のため、全日本（こういう呼び名は死語になってしまったが）チームをヨーロッパ遠征させることになった。ついてはチューリヒでグラスホッパーと試合をしたい。これをまとめてくれ」との手紙が舞い込んだ。グラスホッパーはスイスの名門プロチームで 1954 年に来日、全日本を９－０で破った試合を私も観戦していた。全日本がベルリン・オリンピックの帰途対戦したこともあるらしい。まったく関係がないわけではないが、到着１ヵ月の身としてはどうやってよいか見当がつかない。「ままよ」と、とにかくグラスホッパーの事務局を探して飛び込んだ。

当時、私は「英語に頼っていてはドイツ語、フランス語は上達しない。ドイツ語地域ではドイツ語だけ、フランス語地域ではフランス語だけしかしゃべらないことにしよう」と決心していた。事務局の人にドイツ語を使って説明するのだが「お前、何や？」という感じで門前払いになりそうになった。得体の知れない東洋人が、おぼつかないドイツ語で何かわけの分からないことをしゃべるのでは当たり前かもしれない。

そのとき「何の話なの？」と割りこんで来た人がいる。監督のフーコーだった。フーコーは

1960 年欧州遠征、日本チームの役員と、チューリッヒのホテルの前で
左から高橋英辰監督１人おいて楠田、成田十次郎さん、竹腰重丸団長

1960 年欧州遠征の日本代表チーム、チューリッヒハルトトゥルム競技場で

1954 年の訪日チームのメンバーで、ユーゴスラビア代表の名ウイングとして活躍したフーコー・サリエビッチなのだが、発音が大変なので通称フーコーで通しているとのことだった。「日本ではずいぶんお世話になったのだから、何とかしてやれや」というようなことだったのだろう、東洋の弱小サッカー国のアマチュアチームとの試合が実現できたのである。

クラーマーさんも観戦

1960 年の８月 25 日、ハルトトゥルム・スタジアムで試合が行われた。ドイツのデュイスブルクで合宿していた全日本は、竹腰団長、高橋英辰監督、中条一雄マネージャーのもと、平木主将以下、小沢、八重樫、高森といった、私が関東大学１部リーグで対戦したことのある懐かしい人たちがいた。川淵三郎さんもそのときのメンバーである。野津謙日本蹴球協会長、クラーマーさんも別途デュイスブルクから駆けつけられた。試合は１－４、宮本征勝の鮮やかなシュートで零敗はまぬかれたものの内容は完敗だった。

私は野津さん、竹腰さん、クラーマーさんといっしょに観戦していたのだが、プレーに対する竹腰さんとクラーマーさんの評価が違うのでびっくりしたことを覚えている。平木主将がちょっとしたミスをすると、竹腰さんは「あーあー」と慨嘆するのに、クラーマーさんは「ナイスキャプテン！」と褒めている。私たちにとって神様みたいな存在だったお２人の評価が、まったく違うのにびっくりしたものである。クラーマーさんは、ミスはミスとして、そのプレーの判断を褒めていたのだろう、何とか日本チームの良いところを見つけようとされていたのかもしれないと、後になって思うのである。

グラスホッパーは本当によくしてくれた。試合の収益も折半という考えられない対応をしてくれた。試合後の交歓パーティーでは、スイスの伝説的名手だったビッケル会長が全日本と対戦して 16 － 1 で大勝した思い出を語られた。と、竹腰さんが「あの１点は私が入れたのだ」という。コーチだった竹腰さんが、その試合は選手として出られたのらしい。「“タケノコシ”というのは日本人でも発音しにくいので“ノコサン”と呼んでいる。“フーコーサリエビッチ”を“フーコー”と呼ぶようなもんだ」と説明してあげたら面白がって“ノコサン”“ノコサン”と呼ぶ。とにかく、和気あいあいのうちに行事を終えることができた。

その後、協会とクラーマーさんとの間の話し合いがまとまり、クラーマーさんのコーチ就任が実現するのだが、このグラスホッパーとの試合もクラーマーさんの判断の一つの材料にはなったのだろう。

1963 年、今度は長沼健監督、岡野俊一郎マネージャー、クラーマー・コーチの新体制でデュイスブルク・シュポルトシューレでの合宿が行われた。これには、その年から三共製薬の代表としてバーゼルに駐在されていた有馬洪先輩と駆けつけ、合宿後のジーゲンで行われたドイツ・アマチュア代表との試合までお付き合いした。

この２回のヨーロッパ遠征は、クラーマー・コーチとの出会いにより、のちにメキシコ・オリンピックの銅メダルをもたらし、現在のサッカー発展の基礎となった歴史的な行事だったと思う。この事業に僅かながらも関与できたことは、私の若い日のささやかな誇らしい思い出である。

各　国

サッカーの母国イングランド

井田　淳（昭和 53 年卒業）

2000 年から 5 年間、仕事でロンドンに駐在しました。ダイヤモンドサッカーで育った年代には、あこがれのイングランドです。滞在中私が感じた、サッカーの母国イングランドを紹介しましょう。

ウインブルドン現象

英国の権威ある全英テニス大会も、活躍するプレーヤーは外国人ばかり。これを引合いに出し、英国経済の凋落（ちょうらく）を揶揄（やゆ）して「ウインブルドン現象」という言葉がありましたが、現在の英国サッカー界にも同様の現象が起きており、プレミアリーグ上位チームは、多くの外国人プレーヤーが活躍しています。私がいた頃のロンドンの名門アーセナルは、フランス代表４人を筆頭に、スウェーデン代表、ナイジェリア代表、オランダ代表など、各国の代表クラスがレギュラーに名を連ね、わが国の代表、稲本選手は、リーグ戦では控えにも入れないレベルの高さでした。アーセナル、マンチェスター・ユナイテッド、チェルシーなどは、まるで世界選抜チームであり、イングランド代表より余程強かったと思います。

ＳＯＩの来英

話は変わりますが、2002 年にＳＯＩという、平均年齢 70 歳を超える日本のサッカーチームが来英し、ロンドン近郊の名門アマチュア・クラブのＯＢと試合をしました。このクラブの名前はコリンチャンズ（勇猛で知られたギリシャのコリント人から付けられた名です）。コリンチャンズと言えば、知る人ぞ知るブラジルの名門クラブですが、話を聞いてみると、元もとはこちら英国のコリンチャンズが元祖で、このクラブが戦前ブラジルに遠征したとき、ブラジル人が自分達もこのような立派なサッカークラブを創ろうということで、ブラジル・コリンチャンズが発足し、今ではブラジルの方が有名になったということです。イングランドがサッカーの母国であることを物語るエピソードの一つですが、イングランドには、この伝統があってこそ、世界のプレーヤーを引き付けるのだなと納得した次第です。

考えてみれば、世界のトッププレーヤーが来るということは、世界のメディアやスポンサーが集まり、英国にしっかりと金を落としていきます。そしてサッカーのレベルも向上する。名を捨てて実を取るというのが、イングランドサッカーの「ウインブルドン現象」なのです。

「ウインブルドン現象」は、サッカーに限らず、経済においても、世界に門戸を開放し、海外のプ

SOI のイングランド遠征、コリンチャンズクラブハウスで、左から２人目が井田

SOI のイングランド遠征、コリンチャンズクラブハウスで、右から３人目が井田

レーヤーに存分に働いてもらい、そこに集まるお金で潤うという、英国のしたたかさを表す言葉でもあるのです。

特徴はフェアプレー

サッカーの母国ながら、イングランド代表は世界ではなかなか勝てませんが、イングランドサッカーの特徴は、何と言ってもフェアプレーではないでしょうか？　イングランドのサポーターは、熱狂的で行儀の悪いフーリガンとして有名ですが、プレーヤーは皆紳士です。マイケル・オーエンやデビッド･ベッカムも素晴らしい紳士でした。オーエンはあれ程ゴール前でラフプレーを受けながら、決して審判に文句を言いません。86 年W杯でのマラドーナの奇跡の５人抜きは、相手がフェアなイングランドだったから、途中で反則も受けずにゴールまでたどり着けたという説もあるくらいです。

2002 年のW杯を控えて注目だったのは、イングランドとアルゼンチンの因縁の対決です。82 年のフォークランド紛争が発端ではないのでしょうが、以降のイングランド対アルゼンチンのサッカー試合は、何かと物議を醸(かも)します。86 年メキシコW杯での、マラドーナの“神の手ゴール”、98 年フランスW杯でのベッカムの一発退場など。しかし､このような因縁はあれ､先に触れたフォークランド紛争中にも、イングランド･リーグでは、２人のアルゼンチン選手が活躍し、国外退去になりませんでした（そのうちの一人がアルディレス選手)。この太っ腹がイングランドなのです。

各　国

外務公務員のサッカー体験

荒川吉彦（昭和 50 年卒業）

外務公務員という仕事柄、何回も海外勤務をして、その度に出会いと別れを繰り返す。日本の諸同窓との絆(きずな)もつながったり離れたり。東大 LB 会にもしばし不義理をして申し訳なく思っている。

そんな私がコンスタントに持続しているのは、妻への愛とサッカーへの片想いであろうか。前者をテーマに本の一冊もすぐ書けるが、今回はサッカーについて随想を書けとの由。そこで、後者即ち、海外勤務でも細々と続くサッカーへの想いをつづることにする。

ワシントンでアルゼンチンの優勝を祝う

1978 年 6 月、ワシントン D.C. の閑静な地区をジョギングで通りがかると、瀟洒(しょうしゃ)な建物の前に時ならぬ人ごみを発見。国旗が掲揚され大使館建物の風情である。「そういえば、クラクション連呼の車が何台も走って、アルヘンチーーーナとか叫んでいたな、おりしも今日はワールドカップ決勝の日、さてはアルゼンチンが勝利したか」と、時差ぼけもさめぬ頭で考えて、ケンペスの如く人ごみに突入した。

すると大当たり、アルゼンチン大使館の庭先で祝勝騒ぎが始まったばかりとの由。アルゼンチン･ファンになりすまし「おめでとう」とゼスチャーで伝えたら､サッカーを愛する者同士言葉は不要、お前も一緒に喜べとばかりに、ビールだったかワインだったか振舞われた。ジョギングは中止としたが、おかげで米国研修のしょっぱなに、ワールドカップは美味しいとの真実を体験した。

米国カレッジでプレー

かくして私の最初の海外生活が始まったが、70 年代から 80 年代初めのアメリカでサッカーはマイナーだった。プロサッカーリーグが何年か存

続し、ペレやクライフがニューヨーク・コスモスやL.A.アズテックスでプレーしたけれど、皆盛りを過ぎ、サッカーは見せもののような、ショーもないしろものだった。

私は2年間、マサチューセッツ州にあるリベラルアーツ私大ウィリアムズ・カレッジに在籍、外務省派遣の語学研修に励み、秋はサッカー部に所属し18～22歳の若者にまじってプレーした。もっとも、一軍選手は夏から自主トレに精出していて、9月新学期から加わってもかなわないので、2年続けて二軍だった。一軍公式戦でも二軍戦でも、中盤の3人なり、前線の3人なりが、アメフットやアイスホッケーの如く、セットで何度も交代したり、スライディングタックルが御法度だったりで、カレッジ・レベルのサッカーも少々奇妙なものだった。TV桟敷でも、サッカー番組は皆無なので、仕方なく野球やフットボールなどのアメリカンスポーツに興じたものだ。

語学研修の後に在ニューヨーク総領事館勤務となり、マンハッタンに2年住んだ。ストリート・バスケットは朝から晩まで目にするが、サッカーにはお目にかからず寂しかった。

海外駐在員の親善リーグ

次の海外勤務はインド、カナダ、ケニア、そして再びニューヨークで過ごしたので、このシリーズでも一級のサッカーには遭遇しなかった。いずこもサッカーは不毛か弱小で、かわりにインドはクリケット、カナダはアイスホッケーなどのウィンタースポーツがもっとも盛んだった。

ケニアはマラソンなどの陸上競技やマサイ族のジャンプが脚光を浴びるが、これらに秀でるのは少数派。貧しくてもボール一つで手軽に出来るので、サッカーがもっとも盛んで人気があるようだった。代表チームもホームでナイジェリアと引き分けた実績もあったが、実は、手入れがひどくデコボコで固いピッチにカヌーやオコチャも面食らったとの由。カヌーはうまくいかぬーで、J.J.もオコチャったそうな。ケニアでは出身部族が違うと選手同士足を引っ張り合い、ナショナルチームとしてまとまらない。アフリカ諸国中30数番目をうろうろしており、やはりサッカー弱体国であった。

途上国勤務では助け合って暮らし、娯楽が乏しい中に楽しみを見出す工夫をする。インドでもケニアでも、サッカーを愛する日本人同胞でチームを作り、欧州などからの外交団・駐在員チームと国際親善サッカーリーグ戦をしたものだ。英国勢は手抜きせずムキになってプレーし、オランダ勢はでかくてうまい、アフリカ勢は身体能力抜群、日本は下手で負けが込んでもひたむきでフェアプレー賞受賞と、それぞれの特徴が良く出ていた。

ようやく本場の欧州に勤務

あきらめかけていたころ欧州勤務がめぐって来た。2001年末からアイルランド、2004年8月からポルトガルに各2年半、続けて暮らすことになり、ようやくサッカーどころに着地した。しかし、もはや私は五十路に入る年嵩で、少ない在留邦人中のサッカー人口もごく僅かということで、応援するサッカーに甘んじることとなったのは残念だった。

アイルランドは2002年ワールドカップに出場し、１次リーグ通過、ベスト16でスペインと延長戦まで演じ、PK戦で散ったが、大健闘だった。１次リーグのドイツ戦は最後まであきらめぬアイリッシュ魂の面目躍如で記憶に残る。

ポルトガルはユーロ2004をホストして準優勝、2006年W杯は40年ぶりのベスト４、ユーロ2008でもC.ロナウド等を擁して活躍が期待される代表チームを持つ。どちらの国でもサッカーは幅広い人気があり、代表チームの試合は大入り、目の肥えたファンが応援する。ダブリンのどこでも、一年中緑のフィールドで子供達の試合を父兄や通りがかった人達が応援する光景に出会う。リスボンでは、フットサルやストリート・サッカーに興じる大人子供を良く見かけた。

欧州小国のサッカー事情

いざ暮らすとサッカーをめぐる実情がわかって

面白い。

アイルランドでもっとも人気あるスポーツはサッカーに非ず。ゲーリック・フットボールとハーリングという伝統競技が一番で、毎夏ダブリンの大スタジアムで開催される全アイルランド・ハーリング選手権とゲーリック・フットボール選手権の決勝戦がスポーツの最高峰。また、初春開催のラグビー６カ国対抗ではラグビーの殿堂ランズダウンロード・スタジアムが熱戦に盛り上がる。アイルランドではサッカーは三番手かもしれない。

アイルランドには未だ国立サッカー場がなく、情けないが国際試合にランズダウンロードを借用する。国内リーグは零細且つ弱小。優秀なサッカー選手や監督はイングランドなどでプレー・指導している。

ポルトガルではサッカーは一番人気で他の追随を許さない。ベンフィカのルス、FC ポルトのドラガオンなど名門チームは、立派なスタジアムを持っている。しかし、ポルトガルでも、ベンフィカ、スポルティング、FC ポルトのビッグ３以外は弱小チームばかりで、選手を育てて、他に高く売ることでどうにかチームを存続させているのが実態だ。

さすれば、欧州の小国のポルトガルやアイルランドが、必ずしも良くないサッカー環境の下で３回、４回とワールドカップに出場していること自体賞賛に値する。加えて、出場すれば大いに健闘してその大会を盛り上げてくれるというのは、誠に好感の持てる有難い存在だと考えるべきだろう。

ワールドカップ開催国に勤務したい

久し振りに戻った日本で、高校･大学･J リーグ･日本代表など一連のサッカーをながめると、技術、戦術理解度、そしていろんな施設でも、一昔前よりだいぶ良くなった。中村俊輔はじめ、世界で高評価を得る選手も出てきている。サッカーをめぐる環境は整ってきており、この調子で、日本代表にはワールドカップ常連になってもらいたいと思う。

私の見果てぬ夢は、ワールドカップ主催国に勤務し、日本代表の活躍を間近で応援することだ。外務大臣閣下、この想いを受けとめて、2010 年なら南ア、2014 年ならブラジルに派遣してくれまいか。もっとも、妻の了解取り付けが前提だけどね。

各　国

ＥＸＰＯフットサル大会

本庄孝志（昭和 53 年卒業）

パビリオン対抗がきっかけ

2005 年の夏に日本でサッカーの国際大会が開かれてクロアチアが優勝したのをご存じの方は少ないと思います。この年に 35 年ぶりの万博である愛・地球博（愛知万博）が開催されましたが、そこには 121 カ国が参加し、2,000 名を超える外国人スタッフが働いていました。この外国人スタッフの慰労のために、ＥＸＰＯフットサル大会が開催されたのです。

フットサル大会のきっかけは、外国パビリオンのスタッフが自発的に立ち上げたパビリオン対抗のフットサルの試合を読売新聞社が引き取って、同社の主催の下で行ったことによります。この対抗戦の評判が良く、読売新聞社は万博の主催者である博覧会協会に、「フットサル大会を主催しないか？」と相談を持ちかけました。その相談相手が、博覧会協会の運営統括室長を努めていた私

だったのです。中１の時からサッカーに親しんできた私にとっては、好きなサッカーで人の役に立てる絶好の機会と思い、フットサル大会の主催をお受けしました。読売新聞社には共催をお願いし、フットサル大会の試合結果は読売新聞に掲載され、また系列のテレビ局のニュースでも取り上げられました。

博覧会協会が主催する公式行事なので、外国パビリオンだけでなく、日本のパビリオンなども参加する総合的な大会としました。主催者である博覧会協会も参加することになり、私も監督兼選手として加わりました。この協会チームのユニフォームは日本代表チームと同じ仕様のものを用いました。また、万博のスタッフには多くの女性がいましたので、男子だけでなく、女子の部も設けました。

さて、試合会場ですが、万博会場の中にはフットサル・コートはありませんので、会場から２km ほどのところにある民間のフットサル場を借りて行うことになりました。万博の開場時間は夜の 10 時までで、各パビリオンも夜９時まで開館が義務づけられています。従って、フットサルの試合は、夜の９時半からにしました。夜遅くの開催なので、試合会場の住民から苦情が出ないように、事前に菓子折をもって、お願いに回りました。しかし、大会が始まると大変な盛り上がりぶりで、各パビリオンは多くの応援団が連日繰り出し、大騒ぎで応援していたので、近隣住民から怒鳴り込まれないか冷や冷やの毎日でしたが、日程が進むにつれ、近隣住民の方も応援に来ていただけるようになり、中には畑で採れた果物などの差し入れをして下さった方もおられました。中には、イケメンの外国人スタッフ目当ての女性グループもいました。

男女ともクロアチアが優勝

さて、フットサル大会は６月後半から７月はじめにかけて行われ、４つの予選リーグで、それぞれの１位で決勝トーナメントを行いました。男子、女子共に優勝したのはクロアチアでした。博覧会協会チームは男子が予選リーグ敗退でしたが、女子は堂々の準優勝でした。男子のクロアチアチームは、身長 190cm 近い大型選手を揃えていましたが、体の大きさにかかわらず、テクニックも備えていて、圧倒的な強さで優勝しました。ドイツも強いチームで、体力派を揃え、力でぐいぐい押してくるサッカーで、我が博覧会協会チームは１対３で負けました。サッカーの大国であるイタリア、フランスはサッカーの人材が少ないのか、フットサル大会に参加しませんでした。また、ブラジルはそもそも万博に出展していなかったので、参加しませんでした。ブラジル人の華麗なテクニックが見られなかったのは残念でした。

日本チームの中で活躍したのは、万博消防署チームです。日頃から体を鍛えておられるだけあって、ものすごい運動量で、勝ち上がっていったのです。185 日の会期中に小火が２件あっただけで、忙しくなかったのが良かったとも言われています。消防署チームが円陣を組んだときに行うエールは、ポンと手を叩いて「火の用心」という、

第１回表彰式（クロアチア優勝）

セルジオ越後さんからの優秀選手表彰

試合風景（クロアチア対万博消防署）

博覧会協会チーム（後列中央が本庄）

大変ユニークなもので、観客の笑いを誘っていました。しかし残念なことに、同チームのＧＫが、雨の中の試合でアキレス腱を切断する大怪我をされてしまいました。主催者の我々が傷害保険をかけていたので、治療費は問題なかったのですが、上司の方にこってり絞られたのはお気の毒でした。

このフットサル大会が大好評で、もう１回やって欲しいという声が大きかったので、第２回大会を８月から９月にかけて開催しました。この時は、日本のパビリオンからも参加希望が多くありました。第１回大会男女合わせても 30 チーム程度でしたが、第２回大会では参加希望チームは男子だけで 60 チーム以上にのぼり、このため日本のチームだけで第１次予選を行って、チームを絞ることにして、外国パビリオンを入れて第２次予選を行い、それを勝ち抜いたチームで決勝トーナメントを行うことにしました。

万博会場に講演にきていただいたサッカー解説者のセルジオ越後さんにも、選手の激励にお越しいただき、決勝トーナメントを観戦され、優秀選手に記念品を贈っていただきました。このときは、ちょっとした騒ぎになりました。

第２回大会で消防署チームが優勝

第２回大会では、博覧会協会チームは残念ながら第１次予選で敗退でしたが、女子はがんばって３位入賞でした。優勝したのは、男子は消防署チーム、女子は再びクロアチアでした。1998 年のフランスワールドカップで日本代表が負けた宿敵クロアチアの連覇を消防署チームが防いでいただき、なんとか主催国の面目を保つことができました。

第１回大会の表彰式は、フットサル場で行いました。優勝国のクロアチアの国歌を流し（国歌を探してくるのは大変でした）、近隣住民に配慮しつつ栄誉をたたえました。第２回大会の表彰式は、博覧会の会場内でパーティーを兼ねて行いましたが、選手、応援団が大挙して参加して、大変な盛り上がりでした。

万博の会期は 185 日でしたが、事前の準備、後始末を含めると約１年間もの間、自分の国を離れて慣れないところで生活する外国人スタッフのストレスは、想像を絶するものがあります。世界共通のスポーツであるサッカーによって、彼らと彼女らのストレスを発散できたことも、愛・地球博が成功した要因の一つではないかと思います。